月刊　教育情報誌

明日への学び

第　５　号

２０１３年　１月　１５日　発行
発　行：福井県教育委員会
福井県学力向上センター
ＴＥＬ：0776-20-0295
メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

―教員それぞれが成長し組織力を高める―

「それでも地球は動く。」　地動説を主張したガリレオ・ガリレイが、異端審問時につぶやいたとされる言葉です。コペルニクスの地動説が正しいことを確信した彼ですが、天動説が常識の世界の中では、つぶやくのが精いっぱいであったということでしょう。

天動説は、2 世紀に存在した科学者が明らかにし、十数世紀の間正しいと信じられてきました。科学史家のトーマス・クーンは、「一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対しての問い方や答え方のモデルを与えるもの」を“パラダイム”と定義しましたが、天動説や地動説は、まさに宇宙論のパラダイムということになります。

パラダイムは、先のガリレオの例にあるように、一度支配的な地位を築くと変えることは容易ではありません。既存のパラダイムと新しいパラダイムの間では、同じ土俵上での理性的な議論は困難であり、新しいパラダイムの信奉者は異端視されます。

経営学者は、組織にも、このパラダイムの概念が当てはまることを論じています。

“知識詰め込み型”から“思考力・判断力等を鍛える”教育への転換へ。教員の組織でもパラダイム転換が求められているのではないでしょうか。しかし、“知識詰め込み型”教育が、まだまだ学校の支配的パラダイムとなっているようです。

「いや、私はこれからの新たな学力観に基づき授業を実践しているから大丈夫。」という教員も、もう一度振り返ることが大事です。支配的パラダイムの下では、パラダイム転換の必要性が頭では分かっていても実践が伴いにくいものです。その実践は本当にこれからの新たな学力観に基づくものでしょうか。授業で「これテストによく出ます。」「まずこれができないと、次の問題はできません。」「これが分からない人？分かった人？」といった言葉を使っていませんか。これらの言葉は新たなパラダイムでは用いません。一生懸命やっていても実は知識詰め込み型の古いパラダイムを強化しているだけ。こういう場合は、自分は変わったつもりなので余計に危機的です。

では、どのようにしていけばよいのか。まず、教員一人ひとりがこれからの新たな学力観を意識して実践すること。そして、学校の仲間や外部の人たちとともに研究を行い、学校全体の改革につなげていくことでしょう。一人ひとり教員各々が成長し、それをどのように組織につなげ、どのように学校を変えていくか。今回は、この方法について考えます。

（参考文献）
トーマス・クーン著、中山茂訳「科学革命の構造」みすず書房、1971 年
加護野忠男「組織認識論」千倉書房、2004 年
牧田秀昭、秋田喜代美「教える空間から学び合う空間へ-数学教師の授業づくり-」東洋館出版社、2012 年

＜目　次＞

○「教育力向上に関する指針」の中身を知る　Ｐ　2
○授業力向上のためのシステムづくり　Ｐ　4
○学校全体の活動にしていく　Ｐ　6
○弦楽指導、ゼロからの探究　Ｐ　9
○これからの時代が期待する教育と学校協働　Ｐ１１
　組織づくり
○お知らせ　Ｐ１３

全教員向け

「教育力向上に関する指針」の中身を知る

12 月末、県立大学で開催した会議において、指針を配付

県教育委員会では、先般「学校全体の教育力向上に関する指針」を策定し、１２月末に教務主任等を通じて学校に配付しました。思考力や判断力を持った子どもたちを育むためには、教員がまず探究心を持ち、学び続ける努力をする必要があります。そして、実践したことの意味を振り返り、課題を発見し、次につなげる活動を進め、学校全体の実践にもつなげることが重要です。そのためにどのような活動を進めればよいのか。この指針で伝えたかったことを、再度振り返ります。

○教員および学校全体の教育力向上の最も重要な“場”は“それぞれの学校”

資質向上のための活動というと、どのような場面を思い浮かべるでしょうか。講演会や伝達講習会、通信教育あるいは図書等による個人研修などかも知れません。しかし、それらは汎用性を考慮した内容であり、生徒や教員の質、学校文化、保護者の状況や地域の環境など、個々の学校の特質を踏まえたものになりにくい傾向があります。解決すべきは学校特有の問題であり、それに挑むには校内で教員たちが話し合いながら進める以外にありません。そのための力をつけるには、学校の問題を題材に校内で研修することが不可欠です。学校を職務遂行の場所とすると同時に研修の場所という捉え方をすることをこれまで以上に強めていくことが重要なのです。

○“校内研修”は、学校が元気になる仕組み

校内研修は、職務遂行と研修を同時に実施することで、“多忙感”を解消し、授業の質の向上により、児童生徒を、教員を、つまり、学校全体を元気にすることがねらいです。共通する課題の解決に向けて、同僚同士が自然に語り合える雰囲気をつくり出すことができれば、“やらされ感”は持たないはずです。

○“校内研修”の中心は“授業研究”

校内研修の題材は、子どもの教育に関わることが全て考えられますが、その研修を進める中心的な方法は“授業研究”です。面白い授業、分かりやすい授業を進めることが教員の本分です。

授業研究というと、「我々の学校では既に十分やっている。」と思うかもしれません。しかし、授業研究は、“公開授業”と“授業研究会”だけではありません。立案⇒公開授業⇒授業研究会⇒再構成⇒立案⇒　という循環が成立して初めて授業研究と言えるのです。この仕組みを回転させる上で重要なのが、“立案”と“再構成”です。

まず、“立案”について、特に「なぜこの学習を行うのか」を授業者が深く考えることが必要です。「教科書に書いてあるから。」「テストに出るから」は十分ではありません。

次に、“再構成”について、授業研究会では、「子どもは何を学んだのか」ということを話の中心にしつつさらにステップアップし、「教員は何を学んだのか」を振り返ります。授業研究会を振り返り記録化する。また、授業研究会を受けて、学習指導案を修正していくという活動を自然と行えるシステムづくりこそが、次の“立案”につなげる上で重要です。

○授業研究の上手な進め方

（１）どの授業にも見習う点と改善すべき点がある

「あの先生がやるのだからどの授業も素晴らしいはず。コメントはない。」というのでは誰の成長にもつながりません。どのような授業にも必ず見習う点と改善すべき点があるものです。

また、実践者も、「あの先生のコメントは聞いても役に立たない」と思わないで、若手、ベテラン関係なく、真摯に同僚の語りに耳を傾けることも重要な資質の一つです。

（２）授業の見方の質を向上させることが、授業の質を向上させる

自分の授業実践に持論を持ち、その持論を基軸に子どもがどんな学びをしているのかをみることが大事です。そのためには、授業研究会で、それぞれの授業の見方を公表し、公平な立場で議論し、その議論をじっくり振り返るという長期的な営みが必要となります。また、教育研究所等の要請研修を利用し所員の派遣を受けたり、ミドル研修に参加し、福井大学教職大学院の助言を受けたりすることで、一層視野が広がります。他の授業者の授業の価値を捉えることができるようになれば、自分の授業の質も上がります。

（３）全体の印象だけでなく「子どもが何をどのように学んだか」を語る

教員の発問の仕方や板書の仕方だけを語っていても、肝心の子どもたちがどのような力をつけていたか、授業でどのような変化をしたかを語らなくては意味がありません。そのためには、全体的な印象でなく、具体的な子どもの発言やつぶやき、仕草を出し合って、その意味を探る活動が不可欠です。子どもの学びが明らかになってくると、当然、その要因となる授業者の振る舞いや環境設定、カリキュラムの構造が問題となってきて、地に足がついた授業研究になります。

○各学校オリジナルの協働体制づくりを行う

授業研究は、一人でやれるものではありません。校内でいかに協働が生成する雰囲気を創り出すか。学年、教科、校務分掌に沿ったフォーマルなものや、若手チームやプロジェクトチームなど気兼ねなく語り合えるインフォーマルなものを組み合わせたりするのも良いかもしれません。若手に思い切って全体の仕切りを任せてみる方法もあります。また、「教育情報フォーラム」を活用した他の学校の教員と交流することや、教育研究所や福井大学教職大学院の講師の活用、研究所の講座等で知り合った専門家の参画なども考えられます。

重要なのは、それぞれの学校の特質を踏まえて独自のシステムづくりを進めることです。単にどこかのシステムを模倣するだけではうまくいきません。自分たちの活用できる資源をよく見つめて、元気なシステムづくりを進めてください。

全教員向け

授業力向上のためのシステムづくり

―敦賀市立中郷小学校のコア・ティーチャー養成事業―

―探究心あふれる教員たちが、校内の研修システムづくりを進め授業力を高める―　中郷小学校は、子どもたちの読解力・活用力の強化を目指したコア・ティーチャー養成事業を活用し、そうした活動を展開しています。１２月５日に、小学２年生算数の「かけ算」の授業を題材に開催された授業研究会を参考に、コア・ティーチャー養成事業では実際どのような活動を行っているのか考察します。

○数学専門の教員がいないところからの出発

寺下雅裕校長によると、同校は「数学が専門の教員は一人もおらず、むしろ算数を苦手としている集団」ということです。教員たちは不安を抱えながら授業をしていました。しかし、２０１２年にコア・ティーチャー養成事業に指定されたことで、校長はうまく学校づくりに活用したいと思い、コア・ティーチャーに指名された橋本裕美教諭をはじめ教員全員に「せっかくなのだから、しり込みせず、学校をあげて正面からレベルアップを図ろう。」と呼びかけました。教員はそれに応え、研究授業と校内研修を意欲的に積み重ね、自信を持って算数の授業に臨むことができるようになりました。授業力の向上は他教科にも効果が表れてきていると校長は手応えを感じています。

○学習指導案づくりを進める①　指導主事との意見交換

まず、授業研究の「立案」の部分である算数の学習指導案づくりでは、嶺南教育事務所の指導主事と意見交換をして内容を固めていきます。例えば、今回の授業研究会の「かけ算」のねらいは、単元終末で「身の回りからかけ算を探す」というものでしたが、嶺南教育事務所は、主として次の投げかけを行っています。

（１）授業が単なる“発表会”にならないか。単元終末のまとめにふさわしい九九の意味理解を。
（２）教室の中には思うほどかけ算は見つからない。教室を出るなどダイナミックな活動を。
（３）「子ども同士」の言語活動をどのように充実させ、本時のねらいを達成させるか。

○学習指導案づくりを進める②　教員全体との意見交換

この投げかけに、中郷小学校は全体研修会や学団研修会を開き、全教員が組織的に検討しました。

（１）は、「九九見つけ競争」、「答えを出すことばかりに一生懸命」にならないよう、発問を「身の回りのかけ算を見つけ図や式にかいてみよう。」と図や式を強調し、「基準量のいくつ分」という九九の意味をつかめるようにしました。また、児童の全体発表において、意味理解を一層深めるため、授業者は誰がどんな九九を探したか把握しておき、児童を意図的指名することにしました。

（２）は、教室外の活動は時間的に無理があることなどから教室内の活動とし、授業者が日ごろから九九を自然に仕掛けていきました。特に、毎時間行う九九の学びが、機械的な九九の唱え学習にならないよう、身の回りの具合物に関連させて九九を学ばせることに重点をおくこととしました。

（３）は、自力解決⇒ペア学習⇒全体の意見交換という流れで言語活動を進め、学び合いを深めることで、本時のねらいに迫ります。言語活動を活性化させるため、机間指導や意図的指名の工夫、ワークシートの工夫、書画カメラを活用することとしました。

○実際の公開授業では

まずは、授業者の中野美穂教諭が具体物を写真で示し、児童が九九の式に表すことから始まりました。すると、児童から、「身の回りから九九を見つけてみたい。」と声が上がったのです。そこで

中野教諭は、「教室の中からかけ算で表せるものを３つ見つけよう。」と、自然と中心課題に移していきました。児童は、多数の九九の仕掛けの中で、ボードとワークシートを持ち、我先にと教室を探し回ります。しばらくして席に戻り、隣同士で紹介しあった後、全体の意見交流の時間が始まりました。児童は、「マジックの本数は８本のまとまりが４箱で８×４です。」などと、九九の意味を捉えながら発表していきます。中野教諭は、具体物を示すとともに児童の描いた図を書画カメラで写しながら、児童の発表を支援します。また、あらかじめ把握していた児童の見つけ出した九九を参考に、児童が学びを深めやすいように、間違っているもの、見方によっては違う式ができるものなどを意図的な順で指名していきました。児童は、最後に「身の回りには、かけ算で表せるいろいろなものがたくさんあるのだなあ。」と授業を振り返り、授業後も児童同士で九九を探す姿が見られました。

○県下のコア・ティーチャー指定校が算数・数学の授業づくりについて意見交換する

中郷小学校の授業研究会に先立ち、参加した県下のコア・ティーチャー指定校が各学校の活動の成果や課題について意見交換を行いました。「算数における言語活動は、国語で習得する言語活動とどのような関係であるとよいのか。」、「算数では、数、式、図、表、グラフを用いて相手に明確に、しかも簡潔に内容を伝えようとすることが言語活動である。単に日常語で説明ができることが算数の言語活動ではない。」など各学校が持つ多くの悩みについて意見交換され、最後に今後の課題を確認し合いました。

○全教員と外部指導者が“授業の成果”について検証し合う

さて、その後、再び中郷小学校の授業研究に戻り、全教員が参加して授業研究会が開催されました。最初に、子どもたちが身の回りの事象を基準量のいくつ分という見方と結び付けて考えることができたかが話題となりました。次に、授業者のコーディネートの在り方や意図的指名について、児童の言語活動について、今回の授業意図について等、一つひとつ確認と意見交換が行われました。また、神戸大学大学院の岡部准教授は、授業中に一人の女子児童の行動を追い、タブレットで撮り続けた写真を見せながら、「かけ算になるものを３つ探す中で、多くの児童は３つ目を探す活動に時間がかかりました。それは、２つ目までとは違うタイプを探そうとしていた表れです。児童がタイプの違いを無意識に識別する思考が働いており、授業の目標が十分達成されています。」と評価しました。

○新しい“知”は、内部と外部の有機的なつながりから発生する

授業の質を高めていくためには、まず、教員が探究心を持つことが必要です。中郷小学校は、コア・ティーチャー養成事業という学校組織外からの力をきっかけにして、教員の意識改革と探究心の向上を図っていました。

次に、授業研究の仕組みを作ることです。中郷小学校は、全教員が参加して学習指導案づくりを進めてきました。コア・ティーチャー指定校は、指定２年目には、地域で授業研究を活性化していくことが求められます。地域の中核校として、今後さらに望ましい授業研究スタイルを自律的に確立していくことになるでしょう。

さらに、外部の視点を入れることが重要です。嶺南教育事務所の視点は、授業研究に対する学校のある種の“慣れ”を振り払い、学習指導案づくりに緊張感を生み出します。また、岡部准教授の「児童がどう学んだか」という視点から捉えた結論は、学校が授業研究を“再構成”していく上での情報となります。こうした捉え方を、授業研究を通してできるようになれば、今後、それは授業の成果を捉える一つの“モノサシ”として使えます。

授業研究を活性化させ，新しい“知”がどんどん生産されるようにしていく。今回の事例では、内部と外部との有機的なつながりこそが“知”を生み出すものと結論づけることができるでしょう。

全教員向け

学校全体の活動にしていく

―ミドルリーダーたちの挑戦―

組織の改善を進める中で、極めて重要な役割を果たすのはミドルです。学校で言えば、教務主任、研究主任とそれに続く４０代の教員です。ミドルは、トップと中堅・若手の間に位置し、どちらとも本音の議論が可能な年代で、校内でも一定の信用があります。経験に裏打ちされたアイデアも多数あり改善に取り組みやすい人たちです。しかし、実際にそれを進めるのは困難を極めます。他の教員の協力を得て全体の意識を変えていくことはたやすいことではありません。県内の教員は、どのようにこうした活動に挑んでいるのか。ミドルステップアップ研修に参加した２人の教員に注目しました。

○ミドルステップアップ研修は、学校を舞台にミドルが資質向上を図る校内型研修

この研修は、これまで、教育研究所が行ってきた集合研修に加え、学校を舞台にミドルの教員たちが、資質向上と学校改善を図る校内型研修としてスタートしました。受講者は、「学校経営分野」と「学習指導分野」のいずれかのテーマで学校の課題を取り上げ、１年間を通して学校で実践し記録を残します。そして、この記録をもとに、本研修の受講者や福井大学教職大学院で学ぶスクールリーダー、教育研究所所員などが集まるクロスセッションの場でグループ討議をします。

この研修で必要とされるのは、ミドルが、学校現場で、いかに自分の研修テーマに基づく実践を学校全体の活動に昇華させ、周囲の理解を得て進めていくかという資質です。別の価値観を持つ教員に対してどのように自分の思いを伝えていけばよいのでしょうか。

＜事例①：授業研究のやり方を変える　―高浜中学校　畑田幸子教諭―＞

○本来の校務ではない授業研究を研究テーマに設定

高浜中学校の授業研究会の様子

高浜中学校の畑田幸子教諭は、今年度から必修となった「武道」と「ダンス」における教科指導力の向上を図るため、今回のミドルステップアップ「学習指導」研修講座を受講しました。ところが、学校全体を動かすというねらいの研修であることを知り、愕然としました。畑田教諭は、人に何かをお願いすることがとても苦手だったのです。しかし、一度引き受けたことは必ず最後までやり遂げる責任感が人一倍ある教員でもあります。「申し込んだ以上は仕方がない」と思い、「校内授業研究会の改善」を研究テーマに掲げました。同中学校の授業研究は、発問の仕方や授業の進め方に対して意見交換をする「教材研究型」でしたが、畑田教諭は、授業中の子どもたちの仕草や発話を観察し、「子どもたちがどう学んだか」をありのままつぶさにみる「生徒の学び見取り型」の方が、充実した授業研究ができるのではないかと考えたからです。

○まず研究主任の同意を取り付け、運営委員の支持を得る

しかし、「生徒の学び見取り型」の授業研究が、同中学校の教員の理解を得られるのか非常に不安でした。畑田教諭は生徒指導主事であり、授業研究を主務としていません。そこで、校内で授業研究を担当する研究主任に相談し、なぜ授業研究に着目したかを説明し協力をお願いしました。研究主任は畑田教諭の考えに理解を示し、校長、教頭、教務主任らで構成する「運営委員会」に一緒に持ちかけてくれました。説得力ある改善案にするために教育研究所の指導も仰ぎました。しかし

運営委員会では、この授業研究スタイルがどのような成果をもたらすのか不安の声が上がりました。畑田教諭は、「福井大学教職大学院では主流の授業研究の方法です。教育研究所もサポートしてくれます。一度試行させてもらえませんか。」と訴えました。「やってみないことには、何も始まらない。有効なのかも分からない。とにかく挑戦させてください。」こうした畑田教諭の気持ちに、萩原清二郎校長は、「やってみようじゃないか。」と背中を押したのです。

○その後も求められるリーダーシップ

運営委員会が了承したことで、学校全体の意識共有はすぐにできました。しかし、実施するには大きな課題がありました。「生徒の学びの見取り型」の授業研究では、教員がグループに分かれ、観察する生徒の集団を決め、授業終了後グループ協議を行いますが、多くの教員は進め方が分からなかったのです。畑田教諭は、教育研究所の助言をもとに、授業の見方や意見の述べ方について資料をつくり具体例を示しました。１回目の授業研究会では、グループの司会者に運営委員を充てました。また、一つのグループには、この授業研究をイメージできる２人の先生を意図的に配置し、他のグループのモデル役としての成果が得られるようにしました。実施してみると、司会進行だけでは議論が途切れてしまう、話題が広がりすぎてまとめ切れないなど新たな課題が出てきました。そこで、２回目は、運営委員にファシリテータとして話を深掘りする役を、中堅教員に司会進行を、若手に記録・発表をお願いし、見取りの観点も「資料提供」、「発問」、「グループ活動」の３つに焦点化しました。また、意図して若手が多く発言する機会を設けました。

○今後の課題は

改善案に基づく授業研究会を２回行いましたが、その結果、子どもたち同士の言語活動が非常に表面的で議論が深まっていないこと、同時に、これは大人の世界の裏返しでもあることに気が付きました。私たちの授業研究会でも同様に、「何をどう深めたらよいのか」が分からず議論が深まらなかったり、相手の立場を気遣うあまり表面的な議論になってしまったりすることがあります。これらを改善するためには、ファシリテータ能力の向上も必要であることが分かりました。子どもだけでなく、教員もどう学ぶか、どう学び合うかが大切であることが分かりました。今後も探究していきます。」と畑田教諭は語っています。また、学校としては、こうした授業研究をさらに深めるため、福井大学教職大学院に教員を派遣することを考えています。

＜事例②：総合産業高校化に向けて　ー若狭東高校　中森一郎教諭―＞

○学校全体のまとまりを生み出す方法を模索する

若狭東高校は、２０１３年度に総合産業高校として生まれ変わります。そのための準備として設置された準備委員会の事務局長として奔走しているのが中森一郎教諭です。若狭東高校は、普通科・農業科・工業科の３学科で構成されていますが、教員の異動が学科をまたがることはないため、全体としてまとまるのが難しく、学科別の縦割り感が強い状態になっていました。職業系高校において学校全体の新ビジョンをつくることは、意外に困難を極めるのです。

当初、準備委員会は、制服委員会、教室・特別教室配置検討委員会、カリキュラム検討委員会などで構成されていましたが、全教員が参画しているわけではありませんでした。中森教諭は、これでは全校的な活動にすることは困難と考え、全教員が参画する研修会を開催することとしました。

○一つのきっかけを大切にして成功の実績をつくる

研修会は７月に開催されました。組織づくり、生徒指導・道徳教育、学科間連携など６つの分野

を設け、全教員が必ず一つに参加することになりました。外部講師をベネッセにお願いし、各分野に１名のスタッフを派遣してもらいました。総合産業高校にできること、他県の総合産業高校の実践と現状などについて話を聞きながら、全体として何を目指すべきか議論したのです。

その結果、重要分野として、キャリア教育の充実、あいさつや礼儀など規範意識の向上がクローズアップされました。これを受けて、準備委員会には、これらに関する委員会と全体の調整を行う企画委員会など５つの委員会が設置されました。中森教諭は、これを機に、準備委員会についても全職員が参画することとし、各委員会に１２月までに基本提案をまとめるよう依頼したのです。

○学校長の力を借りる

学校全体を巻き込むために、様々な手を打ったつもりでしたが、それでも十分な意思疎通ができていなかったことが提案の段階で明らかになりました。例えば、企画委員会が提案した「進級・卒業基準の見直し」については、職員会議で明確な反対意見が出ないままその場で否決されるなど、提案に至るまでの過程において、全教員の相互理解が進んでいないことが明らかになったのです。こうした状況に、山森友嗣校長は、例え提案に至るプロセスにおいて意思疎通が十分図られていなかったとしても、職員会議では必ず十分議論を尽くした上で結論を出すよう指示をしました。その結果、職員間に、それぞれの立場や考えを理解しつつ、全体として折り合いを付けようとする雰囲気が生じ、また、更に検討が必要なものについては企画委員会が引き受けるといった流れが生じるようになり、ようやく職員の意見が反映できる体制が整備され始めました。

＜学校全体の活動にしていくための３つの視点＞

○トップが重要な局面でミドルを支援する

ミドルリーダーたちが、学校の変革に取り組む上で、重要な役割を果たすのはトップです。

まず、トップが、「この人なら何かやってくれるに違いない」と考え、そのきっかけをミドルに与えないといけません。組織変革の最初のきっかけは、必ずトップにあります。

また、ミドルが危機に瀕した時に助け船を出すのもトップです。組織は、常に居心地のよい従来に戻ろうとします。その時にトップが毅然とした判断を示すことが重要になるのです。高浜中学校の運営委員会の事例、若狭東高校の職員会議の事例はそれを物語っているでしょう。

○必ずアウトプットを生み出す

どんな小さいことでも、アウトプットを生み続けることが大切です。高浜中学校の事例では、最初の授業研究会の時、他のグループがうまくいかなかったとしても、何らかの成果を出せるようなグループを意図的に作っていました。また、若狭東高校では、全教員が参加した研修会が、準備委員会の中に新しい委員会を作ることにつながっています。人間は、具体例がないと、やっていることの理解を深めることはできません。最初のアクションの際に、必ず次のアクションにつなげることができるよう、アウトプットが生まれる仕組みを創ることが必要です。

○速やかに次の手を打つ

せっかく生じたアウトプットを、どんどん次につなげていくことが必要となります。この役目は、ミドルとともにトップが大きな役割を果たします。高浜中学校が福井大学教職大学院に教員の派遣を目指したり、若狭東高校が準備委員会に全教員を参画させる活動などはその例でしょう。

こうしてみると、ミドル主体の組織変革では、トップがその活動をいかに支援していけるかが成功のポイントと言えそうです。トップがミドルに任せ、ミドルはその期待に応えるため、トップと意思疎通をしながら現状を変えていく。そうした運動を如何に起こせるかが鍵となるでしょう。

［参考文献］　加護野忠男「組織認識論」千倉書房、2004 年

全教員向け

弦楽指導、ゼロからの探究

―子どもの表現力を伸ばす弦楽指導―

自分が知らないことを子どもたちに教えなければならない場面が巡ってきたとします。あなたは、「できません。他の先生にお願いします。」と言いますか。それとも「やってみます。」と言いますか。社北小学校では、県がふるさと納税を活用し購入した弦楽器を借り受け、弦楽クラブを設立しました。弦楽器を教えたことがなかった清川純枝教諭が、どのように子どもたちを指導するようになったのか。その活動に着目しました。

○ポジティブに考えてモチベーションを高める

県が、全国から寄付を受けた「ふるさと納税」を活用し、弦楽器を購入したのは２０１１年のことです。さらに県では、将来の多様な福井文化の担い手拡大を目指し、市町教育委員会を通して小学校および中学校１校ずつの弦楽指導のモデル校候補を探しました。福井市は管轄の小学校で受け入れることを表明し、社北小学校が候補に挙がったのです。

同校で音楽指導に当たっていた清川教諭は、担当を打診されました。異動直後であり、事業が軌道に乗るまでしっかり対応してくれるのではないかという期待からです。しかし、本人は弦楽器の指導経験がありません。「１日休むと３日後退する」と言われる音楽の世界で、月１～２回のクラブ活動で成果が出るのか。自分が異動した後、後任の負担が大きくならないのかと悩みました。

しかし、少し考え方を変えてみると、違った見方ができることが分かりました。厳しい財政事情の折、学校が欲しても弦楽器を購入するのは相当困難なことです。楽器の貸与だけでなく、外部講師費、消耗品等の負担をある程度県が対応するというのは、弦楽クラブを設置する環境としては千載一遇のチャンスと捉え、清川教諭は挑戦することを決意したのです。

○指導法を探究する

２０１１年１０月、４年生と５年生の中から希望者を募集し、弦楽クラブは総勢１５人で発足しました。最初の晴れ舞台は、２０１２年３月の６年生を送る会でしたが、月１～２回のクラブ活動の結果、練習時間は合計９時間程度であったこともあり、音の高低や演奏のタイミングも揃わず、子どものまとまりも欠けていました。様々な人たちの思いが詰まった寄付で購入した弦楽器の活用がこれでよいのだろうかと疑問に思い、清川教諭は、県外で高いレベルの管弦楽や弦楽活動をしている目黒区の東山小学校、台東区の東泉小学校などを訪問しました。活動中の子どもたちの様子、練習時間、練習方法、指導のねらいなど、詳細に聞き取りをし、子どもたちへの教育面を考えれば練習を充実すべきであると考え、保護者の了解を得た上で、７月から週３回、放課後に練習することとしました。清川教諭自身も、外部講師として活動当初からこのプロジェクトに参画しているヴァイオリニストで、仁愛女子高校の教壇に立つ池田恵美講師の指導を受けたほか、船橋市の海神小学校など県外の学校を訪問して調査を重ねました。

○学校全体が清川教諭を自発的にサポート

清川教諭は、９月から活動を週５回に増やしました。部活動がない小学校では、それに準じたこ

うした活動は異例でしたが、竹原康一校長を筆頭に、校内で清川教諭を支援する体制が自然とできていきました。例えば、同じ学年の担任が、学級のバックアップや昼休みの巡回、学年の仕事などを率先して肩代わりしてくれるようになりました。また、練習後の下校指導に時間がかかっていると、別の教員が清川教諭の仕事をしておいてくれたりと、ことさら周囲に協力を呼びかけなくても、弦楽クラブの活動に理解と協力を示してくれたのです。さらに、保護者も子どもの送迎に協力してくれるなど、子どもたちにとって弦楽クラブの活動に参加しやすい環境が整い始めました。

○弦楽指導は子どもたちの表現力を伸ばす教育

「弦楽器は、とても繊細な音を奏でます。でも、全員が揃うとダイナミックな演奏になったりもします。音を使った表現の可能性としては非常に幅が広いのが特徴です。繊細な音の時には全員が呼吸を合わせて音を取ろうとしますし、ダイナミックな演奏の時には弦を使ってポーズを取るなど身体全体で表現することもあります。子どもたちの表現力を伸ばす上では非常に有効な教育だと思います。」と清川教諭は語ります。「ご承知のように弦楽人口は決して多くはありません。弦楽器が高価なのも影響していると思います。しかし、これからの学力観にも合ったこうした教育を進める上では、まず普及活動が重要だと思います。当校は、モデル校として指定を受けたことで、多くの子どもたちが弦楽器に触れる機会を得ることができました。子どもたちも自分の興味や才能に気付き、弦楽演奏を長く続けてくれると良いと思っています。」と清川教諭の思いは広がります。

○弦楽活動を授業にも取り入れる

清川教諭は、こうした弦楽指導を進める中で、今後の方向性を２つ挙げています。

第１に、音楽の授業の中で児童全員に弦楽演奏の楽しさや感動を体験してほしいということです。そこで、１月に、これまでに培った外部講師とのネットワークを活かし、３年生から６年生までの学年ごとに、音楽室という限られた空間ではありましたが、プロの弦楽奏者の演奏を聴く機会をもうけました。また、音楽の学習時にも弦楽器体験を取り入れていきたいと考えています。

第２に、同校の弦楽活動を知らない音楽教諭がまだ多数いることから、２月の音楽教員の主任会で活動を報告し、弦楽教育への理解と関心をもってほしいと考えています。

○県としてどのように進めていくか

弦楽教育をさらに普及していくためには、やはり他の小・中学校でも弦楽器に触れることができるような体制づくりが必要になります。そのためには、楽器の購入や指導者の育成が必要になります。スポーツなどと異なり、福井県では、これらの分野の才能を見つけ伸ばす環境に恵まれているとは現状では言えません。

そこで、県として、これらの芸術活動を気軽にできるよう、楽器の購入や指導者養成などを進め、多くの学校で弦楽活動ができないか検討を進めていきたいと考えています。

これからの時代が期待する教育と学校協働組織づくり

玉木　洋
福井キヤノン事務機株式会社　代表取締役社長
福井大学教職大学院　客員教授

○福井県の教育の独自性

福井県は、学力、体力共に全国トップクラスの教育県として知られています。また、教員の力量向上のために教員養成大学と教育委員会と学校現場の三者が良い関係で協力し、連携していることでも全国的にユニークな地域です。

「日本でいちばん幸せな県民」（PHP 研究所　法政大学・坂本光司＆幸福度指数研究会著）では「日本一幸せな県民」と呼ばれ、「福井の経済―福井県はなぜ豊かなのか」（晃洋書房　松原淳一著）でも、さまざまな指標から、現状の福井県のスタイルは「技術力の高い中小企業と勤勉な労働者が支え合う社会」で、「三世代同居世帯が多く、失業率が低く、一人当たり賃金は高くないが世帯収入は多く、豊かで住み良い社会を構成している」としています。このような地域基盤が福井県の優秀な教師人材層や教育環境を形成してきたとも言われています。

しかし、今後の経済環境の変化や知識基盤社会への移行を考慮すると高齢化・少子化の流れや、若者の県外流出による県内人口減、海外との競争激化による製造業の空洞化や公共投資の減少による県内中小企業の衰退で地域基盤が激変することが考えられます。

これからの社会が求める人材タイプは、「価値創造型人材」、「グローバル人材」、「変革リーダー」と企業は考えています。工業化時代のひたすら真面目で粘り強い人材から一転して、新しい価値を創造する探究型の人材育成が望まれています。

○目的志向で考え、行動する

就職活動をしている大学生に「働く目的」を訊ねると、ほとんどの回答が曖昧です。ある者は「給料をもらうため」と言い、ある者は「自分が成長するため」と言います。しかし、なかなか「世の中の役に立つために」という回答はありません。「世の中の役に立つこと」は、学生のボランティア活動の動機にはなっても、「働く目的」として意識されるまでにはなっていません。

これは、企業の側にも問題があります。たいがいの企業は「顧客本位」、「社員重視」、「独自能力」、「社会との調和」を会社の目的として社是・社訓や経営理念に謳っていますが、日常の業務活動では、売上金額や利益、シェアなどの目標となる目先のわかりやすい成果指標を念頭に行動しがちです。「道徳無き経済は罪悪であり、経済無き道徳は寝言である」という二宮尊徳翁の言葉は、そのまま「目的無き目標は罪悪であり、目標無き目的は寝言である」と置き換えることが出来るでしょう。目的を前提に考え、その目的実現に相応しい方法の目標を設定することが企業経営にも学校経営にも大切なことです。「教育とは、学校で習ったすべてのことを忘れてしまった後に、自分の中に残るものをいう。そして、その力を社会が直面する諸問題の解決に役立たせるべく、みずから考え行動できる人間をつくること。それが教育の目的といえよう」（アルバート・アインシュタイン）

○人間力を高める

「人間力」は、目的に向かって「行動する力」、「考える力」、「協働する力」の三要素から成り立っていると考えています。経済産業省が提案した「社会人基礎力」もほぼ同様です。過去の経済成長時代には、画一的なスキルがあれば役に立った時代でした。いわば予め正解のあるテスト問題を素早く解く力があれば、「有能」とされていました。大量生産・大量販売の時代に、企業はライバルとの横並びの競争の中で、「より安く、より速く、より便利に」の効率の「差別化」を追求してきました。これからの価値創造の時代には、「独自化」を創出する人材と組織能力が必要になります。

しかし、企業内教育では専門能力を教えることはできても、人間力を育成する方法も、人材も風土もありません。過去には人間力育成は学校教育や家庭教育、社会教育の範囲で十分だったのです。いまこそ、企業内でも人間力教育が望まれています。真面目でお行儀のよい画一型より、ちょっと変わっていても好奇心旺盛な探求型の人材が望まれています。

○対話による学び合いと協働の学校組織風土づくり

社会が求める人材像が変わってきたときに学校教育の在り方も変化せざるを得ません。決まった正解を求めるのではなく、より良く時代の変化に対応していくことが教育の内容にも、学校組織にも求められます。ともすれば「教室王国」、「教科の壁」、「教師の多忙化」など協働組織づくりに逆行するような独特の言葉が学校にはあるようです。大概の組織の問題は、リーダーシップと対話によって解決します。リーダーシップは組織の目的を共有することによって発揮されます。対話の仕組みは、それが重要だと認識したら、何にもまして優先して参画を促すことが可能になります。

○「学校評価」ＰＤＣＡ（計画･実行･検証･改善）から省察・学習サイクルへの進化へ

学校に義務付けられている学校評価については文科省からガイドラインが示されているだけです。ということは、学校独自に組織の振り返りの仕組みとして独自に有効活用することが可能であるということです。学校評価は、学校の目的を実現するためのアセスメントツールですから改善するだけではなく、新たな革新サイクルを産み出す省察･学習の仕組みとして仕組みそのものを自発的に進化させてゆくことが必要と考えています。

これからの時代変化に適う教育と学校協働組織づくりの担い手として、現場の「スクールリーダー」の先生方に期待しています。

教育向上セミナー（学力向上センター）

保護者のための教育力向上セミナー

子どもたちが未来を切り拓いていくために、今、保護者にできることとは？
教育界でご活躍の方々が、自らの教育実践をもとに、子どもたちに必要とされる力や、家庭が果たすべき役割についてわかりやすく教えてくださいます。

セミナー終了後に、学習相談会を開催します！　15：00～16：00（参加自由）

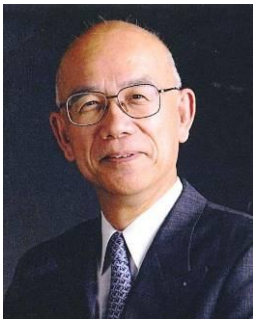
※ 事前に申込が必要です。詳しくは福井県学校教育政策課ホームページをご確認ください。

第１回

日　時：平成２５年１月１９日（土）13：30～15：00（13：00 開場）
会　場：プラザ萬象　小ホール
敦賀市東洋町 1-1
講　師：石坂　康倫（いしざか　やすとも）氏
学校法人東洋大学京北中学校・高等学校長および京北学園
白山高等学校長、前東京都立日比谷高等学校長

第２回

日　時：平成２５年２月９日（土）13：30～15：00（13：00 開場）
会　場：ユー・アイふくい　多目的ホール
福井市下六条町１４－１
講　師：矢和多 忠一（やわた　ただかず）氏
東大寺学園中・高等学校長、前奈良県教育長



第３回

日　時：平成２５年３月１６日（土）13：30～15：00（13：00 開場）
会　場：ユー・アイふくい　多目的ホール
福井市下六条町１４－１
講　師：江藤　真規（えとう　まき）氏
教育コーチングオフィス サイタコーディネーション代表

対象者　小・中・高等学校の保護者　　定員 300 名

お問い合わせ／福井県学力向上センター（福井県教育庁学校教育政策課内）
TEL　0776-20-0295

研究発表会案内（特別支援教育センター）

平成２４年度　福井県特別支援教育センター

実践研究発表会

１　趣　旨　特別な教育的ニーズのある幼児児童生徒への指導や支援の在り方に関する実践研究の発表を通して,広く意見や情報を交換し,指導の一層の充実と教職員の資質の向上を図る。

２　主　催　福井県特別支援教育センター

３　期　日　平成25年2月15日（金）

４　会　場　福井県立大学交流センター　３階多目的ホール

５　日　程

【午前の部】　９：20～ ９：50　受付
10：00～10：10　開会
10：10～11：20　研究発表（１テーマ　発表…20 分）

	研　究　主　題	発　表　者
1	教師間で目標を共有し児童が主体的に動けるような授業改善に取り組む～授業研究会での活発な話し合いを通して～	福井県立福井南養護学校 教諭　髙嶋　友里子
2	教育と医療の連携 ～医療的視点を取り入れた学びの場の構築～	福井県立嶺南東養護学校 教諭　伊藤　ゆかり
3	通常学級に在籍する特別な教育ニーズがある児童への支援の工夫 ～入学前から卒業後までを見通した支援を考える～	勝山市立成器西小学校 教諭　松村　千里

11：25～11：40　質疑応答
11：40～12：05　講評　福井大学教職大学院　教授　　松木 健一 氏
12：05～　昼食・休憩

【午後の部】12：30～12：55　受付
13：00～14：15　研究発表（１テーマ　発表…20分）

	研　究　主　題	発　表　者
4	保育園における親子療育教室	福井市立啓蒙保育園 主任保育士　長谷川　清美
5	学びの喜びを知る子 ～活用力を育てる算数の授業を通して～	永平寺町御陵小学校 教諭　奥田　和美
6	高等学校における特別支援教育コーディネーターの役割について	福井県立高志高等学校 教諭　山田　典生

14：15～14：25　質疑応答　　14：25～14：35　休憩
14：35～15：20　研究発表（１テーマ　発表…20分）

	研　究　主　題	発　表　者
7	通常学級に在籍する気がかりな児童の支援 ～コーディネーターとして～	鯖江市吉川小学校 教諭　松村　博江
8	授業研究会を通した学校支援	福井県特別支援教育センター 指導主事（特別支援教育）多田　哲也

15：20～15：30　質疑応答
15：30～16：00　講評　福井大学教職大学院　教授　　松木 健一 氏
福井大学教職大学院　講師　　笹原 未来 氏
16：00～　閉会

研究発表会案内（教育研究所）

平２４年度 第２９回福井県教育研究所 研究発表会

～学び合い 語り合い 伸ばそう教師力～

［期　日］ 平成２５年２月１４日(木)

［会　場］ 福井県教育研究所
福井県立青少年センター

［プログラム紹介］

レクチャーフォーラム

テーマ：「これから求められる教員の資質とは」

講　師：福井大学大学院教授
中央教育審議会 教員の資質能力向上特別部会委員　松木健一　氏

内　容：松木先生から、中央教育審議会の審議のまとめについて、また、特別部会で語られた内容についてお話しいただき、その趣旨や、今求められている教員の資質等について質疑応答などを行います。

講　演　会

テーマ：「授業づくりのコツ・子ども理解のポイント」

講　師：京都女子大学教授、京都女子大学附属小学校長　吉永幸司　氏

内　容：教材の見方や授業を通して、子どもにいかに学びの灯をつけるか、また、子どもを伸ばす具体的な事例などについてお話しいただきます。

・研 究 発 表

所内外１９本の研究発表です。「国語科」「理科」「社会科」「図工･美術科」「音楽科」「商業科」「学力向上」「外国語活動」「特別活動」「特別支援」「ICT 教育」「教育相談」など、多岐にわたる発表が用意されています。また、「授業名人の技継承事業」の発表も含まれています。

＜研究発表ピックアップ＞

学習効果が高まる ICT 機器の活用について
～タブレット型コンピュータの利用を通して～

＜全校種　全教科＞
児童生徒にとって分かりやすい授業の実践に向けて、タブレット型コンピュータの効果的な利用方法、および、学習効果が高まる利用方法について研究してきたことを報告します。
また、ｉPad を利用した授業についてワークショップを行います。

教育研究所研究員／脇本 裕之

学級･学校集団における望ましい人間関係育成のために　～ソーシャルスキル教育の実践を通して～

＜小学校　特別活動＞
安心･安定感のある集団づくりに向けた手立ての一つとしてソーシャルスキル教育を取り上げます。
短時間での活動案やスキル定着のためのプログラム案を基に、実践に生かすための工夫について話し合います。

教育研究所研究員／野路 貴美恵

今年度の研究発表では、発表を基にグループ協議やワークショップなどを行います。発表者と共に参加される方々が互いに学び合い、語り合う中で、教師力の向上を目指します。御期待ください。

○参加者を募集中（締切 １/３１）です。研究発表①、②、③のうち、１つの時間帯だけでも参加可能です。レクチャーフォーラムや講演会と複数の研究発表を組み合わせるなど、興味関心のあるものに是非参加してください。**詳細は第二次案内およびホームページを御覧ください。**

研究発表会案内（嶺南教育事務所）

第１８回 嶺南教育事務所

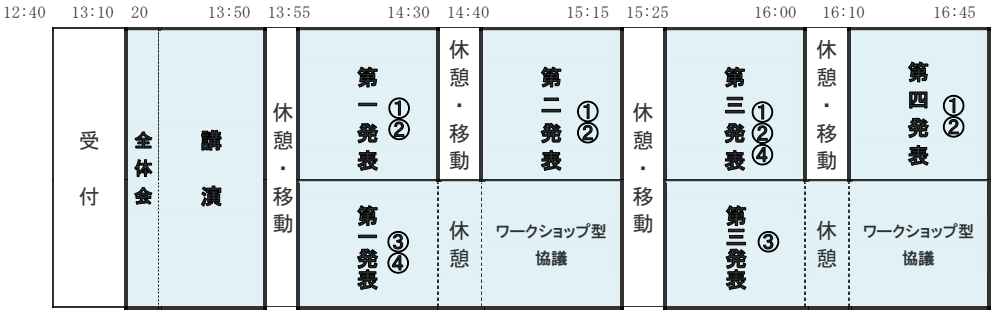
教育研究発表会

広げよう！学び合いの輪

１　期　日　　平成 25 年 2 月 19 日（火）

２　会　場　　福井県教育庁嶺南教育事務所（〒917-0241　小浜市遠敷 2 丁目 205）

３　日　程



４　講　演

演題「学び続ける教師像」

福井大学大学院教育学研究科　教授　森　透

５　研究発表　全１２発表（詳細は、嶺南教育事務所ＨＰにてご確認ください）

【主な発表内容】

学校づくり	学校事務	生徒指導	学級経営
学習指導	人権教育	情報教育	ふるさと学習
	保小連携	教育相談	特別支援教育

６　申込み　☆別紙の参加申込書に必要事項をご記入の上、FAX でお申し込みください。

☆申込み締め切りは、平成 25 年 1 月 31 日（木）です。

７　その他　☆自動車でお越しの際は、できるだけ乗り合わせをお願いします。

☆駐車場は、［事務所前駐車場］［若狭歴民横第 2 駐車場］をご利用ください。

☆お問い合わせは、嶺南教育事務所 研修課　教育研究発表会担当　まで。

TEL 0770-56-1302　FAX 0770-56-1391

参考図書

■ﾏｲｹﾙ･ｻﾝﾃﾞﾙ『ﾊｰﾊﾞｰﾄﾞ白熱教室＋東大特別授業（上下）』2010 年 10 月（採用内定者研修図書）

私たちの暮らしにひそむ哲学の根源的なテーマを鮮やかに取り出し、古今の哲学者の思想を織り交ぜながら、刺激に満ちた議論が繰り広げられる。ハーバード大学史上屈指の人気を誇る名講義の書籍化。上巻は、ＮＨＫ教育テレビで放送された「ハーバード白熱教室」の第１回~６回まで、および 2010 年 8 月に行なわれた東京大学特別授業の前篇「イチローの年俸は高すぎる？」を収録。（Amazon ウェブサイトより）

■ホメロス著ほか『イリアス』（上下）岩波文庫、1992 年 9 月（採用内定者研修図書）

トロイア戦争の末期、物語はギリシア軍第一の勇将アキレウスと王アガメムノンの、火を吐くような舌戦に始まる。激情家で心優しいアキレウス、その親友パトロクロス、トロイア軍の大将ヘクトルら、勇士たちの騎士道的な戦いと死を描く大英雄叙事詩。
（Amazon ウェブサイトより）

■「教職課程２月号」（協同出版）　―福井の教員が全国に授業づくりを提言―

教員志望者向け雑誌「教職課程」では、福井県の教員が「模擬授業対策　わかる、できる、チカラがつく　授業のつくり方、進め方」というテーマで１年間にわたり、連載を行っています。
２月号は、小学校音楽、中学校音楽、高校物理がテーマです。是非ご覧ください。

芦泉荘からのお知らせ

芦泉荘からのお知らせ

～寒さが厳しいこの時期はゆったり温泉、ヘルシーな食事で女子会～

「ヘルシー美食プラン」

１泊２食付（税、入湯税込）

期間：平成２５年３月３１日まで

10,000円

☆☆ご近所、ご家族での集まりにも是非ご活用ください☆☆

メニュー

- 食前酒
- 福井ポーク　豆乳鍋
- エビマリネ
- 季節の野菜煮物
- 海鮮サラダ
- 蒸し物
- お造り
- 季節の果物
- 五穀米、吸物、漬物

ご意見をお寄せください。

連絡先：福井県学校教育政策課

住所　：福井市大手 3-17-1
TEL　：0776-20-0295
FAX　：0776-20-0668
Mail：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp